

委員会報告

地域歯科医師会が報じた水道水フロリデーションの実施状況  
—京都府歯科医師会報から—

日本口腔衛生学会 フッ化物応用委員会

中川 哲也<sup>1,3)</sup> 八木 稔<sup>1,4)</sup> 三宅 達郎<sup>1,3)</sup> 磯崎 篤則<sup>1,5)</sup> 井下 英二<sup>1,6)</sup>  
相田 潤<sup>1,7)</sup> 荒川 浩久<sup>1,8)</sup> 石塚 洋一<sup>1,9)</sup> 川村 和章<sup>1,10)</sup> 小林 清吾<sup>1,11)</sup>  
鶴本 明久<sup>1,12)</sup> 晴佐久 悟<sup>1,13)</sup> 眞木 吉信<sup>1,9)</sup>

**概要：**日本口腔衛生学会フッ化物応用委員会は、水道水フロリデーション（以下フロリデーションと略記する）のう蝕予防という成果そのものによるベネフィットを提示するだけでなく、試行錯誤の詳細なプロセスを記録し、将来に役立つ資料を残すため、地域歯科医師会のフロリデーションへの姿勢あるいはプロモーションについて調べることにした。1945年6月から1972年2月までの京都府歯科医師会が発行した会報（京歯月報）の記事を対象とした。フッ化物関連で抽出された34レコードの記事のうち、フロリデーションについての記事は5つであった。フロリデーション関連の記事数は、これほど大きな公衆衛生的な事業にしては意外に少なく、フロリデーションのう蝕予防効果と安全性を積極的に紹介するというものでもなかった。実験研究のためのフロリデーションについて、実施をリードした大学から地域の歯科医師会に対して詳細な説明や具体的な協力の要請がなかったのではないかと推測され、そのことがフロリデーションに地域の歯科医師会は関係がないという姿勢、または、一部の歯科医師のように反対の立場を招くような結果になったのかも知れない。フロリデーションについては、地域歯科医師会のプロモーションが必須であると考察した。

口腔衛生会誌 69 : 223-231, 2019

緒 言

日本におけるフロリデーションは、1952年2月、フッ化物濃度0.6 ppmで京都市の山科上水道において実験的に開始された。実験に先立つ1950年6月、山科浄水場弗素化対策委員会が組織された。その委員は京都府（衛生部長）、京都市（水道局長、衛生局長、上水課長）、山科保健所長、京都中央保健所歯科係長、大阪府（口腔衛生対策委員）など行政関係者、ならびに、京都大学・京都府立大学・大阪大学・大阪歯科大学（教授または助教

授）など大学関係者、さらに、京都府歯科医師会（会長、公衆衛生部理事）など専門組織であった<sup>1)</sup>。

フロリデーションは、当初提示された計画期間12か年位よりも1年長く継続され、1965年2月に中止された。フロリデーションによるう蝕予防効果が確認され、とくに傷害が出現したこともなく、また住民による反対運動のために中止されたわけでもなかった。その後、京都市水道局は、延期されていた浄水場の拡張工事に取りかかった<sup>2,3)</sup>。美濃口教授（京都大学）は、日本におけるフロリデーションの実施について、歯科医師会、厚生

<sup>1)</sup> 日本口腔衛生学会フッ化物応用委員会：平成29年～平成31年

<sup>2)</sup> 京都府歯科医師会

<sup>3)</sup> 大阪歯科大学口腔衛生学講座

<sup>4)</sup> 新潟リハビリテーション大学医療学部

<sup>5)</sup> 朝日大学

<sup>6)</sup> 滋賀県衛生科学センター

<sup>7)</sup> 東北大学大学院歯学研究科国際歯科保健学分野

<sup>8)</sup> 神奈川歯科大学

<sup>9)</sup> 東京歯科大学衛生学講座

<sup>10)</sup> 神奈川歯科大学大学院口腔衛生学講座

<sup>11)</sup> 日本大学

<sup>12)</sup> 鶴見大学

<sup>13)</sup> 福岡看護大学基礎・基礎看護部門基礎・専門分野

省行政当局の判断・行動に委ね、京都大学は研究教育機関としての分限をつらぬき、(研究の)起承転結を明らかにした<sup>4)</sup>と述べている。

その後フロリデーションは、1967年から三重県歯科医師会が中心となって三重県朝日町において1971年まで6年半にわたり実施された。この事業は、地域の歯科医師会が積極的にプロモーションを行って実現された日本初の事例であった。ただ、この事業も水量不足による給水施設の変更のため中止された<sup>5)</sup>。

京都市山科地区における実験中のフロリデーションに対する姿勢について、地域の歯科医師会(京都府歯科医師会)の情報は不足している。また、その実験の終了後、京都市内におけるフロリデーションの再開のために、京都府歯科医師会がプロモーションを行ったか否かについての情報もほとんど見当たらない。地域の歯科医師会がフロリデーションについて、どのような姿勢で臨んだかという有用なエビデンスや教訓を残すことが重要である。フロリデーションのう蝕予防という成果そのものによるベネフィットを提示するだけでなく、試行錯誤の詳細なプロセスを記録し、将来に役立つ資料を残す必要がある<sup>6)</sup>。そこで、地域の歯科医師会がフロリデーションの実施期間中、会員に対してどのような広報を行ったのかに着目し、実験前後の地域歯科医師会のフロリデーションへの姿勢あるいはプロモーションについて調べて検討することにした。

### 対象および方法

1945年6月(第二次大戦終了直前、京都でのフロリデーション開始7年前)から1972年2月(同終了7年後)までの京都府歯科医師会が発行した会報(京歯月報)の記事を調査対象とすることにした。この期間であれば、京都市におけるフロリデーションの経緯を十分にカバーできると考えたからである。対象となった記事は、すべて公刊されたものであり、文章記録(テキスト)に限られていた。

2017年8月、京都歯科医師会館において対象となる「京歯月報」を貸出してもらった。「弗素」「弗化物」「フッ素」「弗化」「フッ化物」「斑状歯」「上水道」「美濃口(教授)」の語をキーワードにして、著者らのうち2名(T.N., M.Y.)が通読により対象とした記事の全文を検索した。各自が検索した結果として抽出された記事を互いに突き合せて過不足のないよう努めた。該当した記事をコピー(リプリント)し、一つの記事を1レコードとして、レコードごとに発行年・月、会報の巻、タイトル、記事/備考、フッ化物に関するキーワードを記した集約表を作成した。

また、京歯月報に掲載されたフロリデーションを含むフッ化物応用と、それらの記事が出てくる頻度を経年的に調べた。

### 結 果

検索の結果、1946年12月15日から1972年4月1日まで34レコードの記事が抽出された。このうち、フロリデーションについては、5つの記事(全記事の11.8%)が抽出された(巻末資料)。

最初のもは、1956年12月1日付「学校歯科の問題点」と題する記事で、実験開始後5年目の成果として、約2割程度のう蝕の減少が伝えられている。

次のものは、1958年4月1日付「学校歯科の歩み」と題する記事で、美濃口教授の弁として、山科上水道に弗素混入以来の成績を述べるに当たって、対照地区である修学院と比較し少なくとも35~40%のう蝕抑制率および低学年においてその効果が大きいことが示されたという実状報告が記されている。そして、当初の期待に沿う成果は今後期待できると述べられている。

その次は、1958年6月1日付の日本短波放送「歯科医の時間」という6月放送の番組を紹介した記事であり、「飲料水と弗素」と題し美濃口教授と日本歯科医師会代議員・上野 勇氏との対談が放送されると告知したものである。

さらに、1961年11月1日付「弗素の生物学的意義」と題する記事で、「弗素が齲蝕予防に用いられる事は周知の事実である」という歯科医学的な事実、また、フッ化物歯面塗布、フッ化物内服剤、フッ化物配合歯磨剤などいくつかの方法が紹介され、京都大学によるフロリデーションの成績について言及されている。これに加えて、フッ化物の生体への影響と意義について述べられている。

最後のものは、1966年11月1日付で「念のため」と題され、「京大が山科地区で実施してきた上水道の弗素投入は昭和40年度を以て終了しております」とのみ記された短い記事である。これは実際に終了した後、1年9か月を過ぎてから報じられたものであった。

フロリデーションについての記事が最後に出た1966年11月までを前期、それ以降を後期に区分したとき、それぞれに記載されたフッ化物応用(全身応用と局所応用)の出現頻度に差がみられた。前期では全身応用13件(記事全体の38.2% - 内服用の製剤:11件、弗化ソーダ給食添加:2件)、および局所応用6件(記事全体の17.6% - 歯面塗布:5件、歯磨剤:1件)であった。なお、「内服用の製剤」については、「弗素混入栄養剤ビタ

フロール」,あるいは「フッ素入肝油剤(一日一粒服用)」などと記載してあった。これに対して、後期では5件の記載で全身応用0件、および局所応用5件(記事全体の14.7% - 歯面塗布:4件、歯磨剤:1件)であった。

なお、斑状歯に関する記事は3件(記事全体8.8%)あり、現地調査のエピソード(前期1件)、テレビ番組のテーマ募集の例(後期1件)、およびそのテレビ番組のテーマとして広報されたもの(後期1件)であった。

## 考 察

フロリデーショ関連の記事数は、これほど大きな公衆衛生的な事業にしては、意外に少なかった。それらの記事においても、フロリデーショのう蝕予防効果と安全性を積極的に紹介するというものでもなかった。これは、京都市山科地区におけるフロリデーショ事業が京都大学主体の研究と捉えられることが大きく、実施に先立って山科浄水場弗素化対策委員会が組織されたが、実験研究のためのフロリデーショについて、大学から地域の歯科医師会に対して詳細な説明や具体的な協力の要請がなかったのではないかと推測される。もし、大学が地域の歯科医師会に期待せず、実験の計画と成果を求めることに重点を置いていたとすれば、そのことがフロリデーショに地域の歯科医師会は関係がないという姿勢、または、一部の歯科医師のように反対の立場を招くような結果<sup>1)</sup>になったのかも知れない。

また、月報誌にフロリデーショの開始を告知する記載がなく、同じく終了の告知にいたっては、終了後1年9か月も経ってからの記事しかみられない。

さらに、地域の歯科医師会は、フロリデーショ実施時期に、その普及をプロモーションすることもなく、むしろ全身応用としては、どのくらい普及・実施されたかどうかは不明であるが、学校での応用として「内服用の製剤」を奨めるかのような傾向が伺えた。フロリデーショ終了からは、地域の歯科医師会は、フッ化物歯面塗布などの局所応用を紹介し、その講習会などを開くようになっていた。こうした表現や活動が、地域の歯科医師会において実験後にフロリデーショのプロモーションが

起こされなかった要因の一つではないかと考えられる。

2007年、京都府歯科医師会は、昭和27年2月の「京都大学口腔外科が山科地区上水道にフッ化物添加実施(40年3月まで)」について言及し、「歯科保健上の肯定的な結果にもかかわらず中断された理由は、本事業が厚生省の委託研究で期限付きであったこと、また、地区の給水量拡大に伴い、他浄水場より一部給水されることで継続性が失われたことなどであった」と述べている<sup>7)</sup>。また、フッ化物局所応用による地域ベースの施策についても言及し、昭和60年4月に「京都市フッ化物歯面塗布事業始る」、および平成17年7月に「京都市内全小学校を対象にフッ化物洗口を実施開始」と述べている<sup>7)</sup>。とくに後者については、京都府歯科医師会の支援と協力の下に3か年計画で実現したことが指摘されている<sup>8)</sup>。

フロリデーショについて行政、歯科専門団体(歯科医師会)、学術団体(大学)の3者の見解が出揃った現在、歯科医師会の役割はきわめて大きいという指摘がある<sup>8)</sup>。よって、フロリデーショの再開についても、あらためて地域歯科医師会のプロモーションが必須であると考察した。

## 文 献

- 1) 美濃口 玄: 山科地区上水道弗素化11カ年の成績ならびに上水道弗素化をめぐる諸問題. 京大口科紀要4: 55-124, 1964.
- 2) 美濃口 玄: 山科上水道弗素化始終経緯. 口腔衛生会誌30: 1, 1980.
- 3) 美濃口 玄: 上水道弗素化の評価. 日本歯科評論335: 20-29, 1970.
- 4) 美濃口 玄: 非フッ素性エナメル不全-第26回口腔衛生学会シンポジウムから-. 日本歯科評論427: 71-86, 1978.
- 5) 加藤久二, 中垣晴男, 石井拓男ほか: 三重県朝日町における上水道フッ素化3年9カ月の齲蝕抑制効果について. 口腔衛生会誌25: 83-98, 1975.
- 6) 三宅達郎: 次世代への贈りもの. 口腔衛生会誌68: 189, 2018.
- 7) 創立100周年記念誌作成委員会: 社団法人京都府歯科医師会創立100周年記念誌 歩み続けて一世紀, 社団法人京都府歯科医師会, 京都, 2007.
- 8) 筒井昭仁, 八木 稔, 平田幸夫ほか: 日本における水道水フッ化物添加の実現に関する論考 - 関係者の合意形成と環境整備 -. 口腔衛生会誌51: 138-144, 2001.

巻末資料 水道水フッロリレーションを含むフッ化物応用に関する記事 (京都歯科医師会月報: 1945.8 - 1972.12)

発行年月日	タイトル	記事/備考
1946年12月15日	謹賀新年 京都帝大歯科部長 美濃口 玄	そして其の第一として弗化物による齲蝕予防を取り上げて医局全員全力をつくして居り昨年十月稚松校で小林田原両君によって吾國始めての弗化物局所塗布による実施を行う事を得、日本の歯科の歴史的な記録になるであろう事に學者として限りない喜びを持って居ります。 弗素療法の問題は前々から吾々のアイデアとして持って居たものでありましたが昨年三月アメリカの雑誌を始めて手にして是はヤラレタと思ひ更に其の全貌が判るにつれ是は吾々日本人に依って一歩先に進められるぞと考えられる様になって来ました。然し困難は研究室のみに限るのではなく、外に出て実施と云ふ事に色々の隘路があるのですが此点吾々の恵まれた事は堀内會長始め會理事及び會員諸兄の絶大なるご理解と御援助とを得た事であります。
1949年2月15日	研究会並びに講演会のお知らせ	日時 参月六日午後一時本会館にて 一. 弗素と齲蝕 (示説) 京大歯科部長 美濃口博士 外歯科教室員 一. 経済九原則に就いて 元大蔵政務次官 中村三之路先生 (迫而 弗素示説終了后弗素を分議の予定)
1952年8月25日		日本歯科醫師會學術會議近畿地区歯科醫學大会 大會プログラム 10.00 京都府代表 (8) 弗化物内服による齲蝕予防効果に就いて 京都 荒垣一郎ほか2名
1953年8月1日	豪華絢爛●●京都府歯科医師会学会の盛況	(午前の部) 九時 8 弗化物による乳酸菌の消長 小野達一郎 (府大)
1955年1月1日		ムシ歯の少ない地方から発見された……「弗素」。ムシ歯にならない人の唾液から発見された……「アンモニウム」特に子供の歯に作用して硬い強い歯をつくる……「弗素」「アンモニウム」を応用した日本で唯一の子供用練歯磨です可愛い子供にお勧め下さい。(広告)
1955年3月1日	学校歯科便り 庶務理事 後藤宮治 (1) 明治工業研究部との懇談会	二月十二日午後二時より齲蝕予防対策として京大美濃口博士指導の下に弗素混入栄養剤ビタフロールの製作に努力し多大の成果を収めつつある明治工業に研究部が新設せられ大歯出身の阪本氏が部長として就任されたのを期に本会役員との懇談会を開催し学童の齲蝕予防対策に対し相互の意見を開陳し今後相携えて学校歯科衛生のために邁進すべきを誓って散開
1955年5月1日	学校歯科欄	2、弗素に関する対談録音 四月十日午後二時より春日校に於て京大美濃口教授と本会嶋理事の対談を録音し京大より大川氏明功の阪本氏又本会より長谷川副会長後藤理事列席し後藤理事司会の下に対談を開始美濃口教授は貴重なスライド及データーを示しつつ嶋理事の質問に対し極めて平易にあらゆる層に理解し得ることを目標に約一時間に亘る対談を了し成功を収めたり。 因みに美濃口教授は十三日より約一ヶ月の予定にて台湾に渡り各地に於て講演を行い又研究資料の蒐集を行つて五月十日頃帰着の筈。
1955年7月1日	学校歯科 卷頭之辞 京都府学校歯科医会長 前田 勝 木津に於ける斑状歯研究会 有意義に開催	六月十八日午前六時五十五分発にて本会の前田、上野、嶋、長谷川、吉岡、後藤等六名は京大の美濃口教授大川講師天野医員及明功の阪本研究部長同伴にて時代の脚光を浴びて吾々の関心を深めつつある斑状歯の研究視察に赴き途中網野町に下車赤井氏の出迎えを受けて保健所の車を飛ばし長谷川、吉岡、後藤の三名は網野小学校二ヵ所に於て衛生講演を行い吉岡氏の腹話術に依る講話は大喝采を博し多大の感銘を与えて盛況裡に終了後更に新緑の目に秘む山道を疾駆して木津に至り小学校講堂に於て再び後藤、長谷川、吉岡氏の講演を行い美濃口教授の指導に依り学童を實際に於て斑状歯の認識を深め大いに得る所あり更に養護教諭保健主事を対象として美濃口博士から貴重な研究業績に基く意見開陳あり質問に対えて相互に裨益する所多く有意義の会合を終つて木津温泉に一泊。 湯の香もなつかしい旅の宿に疲れを休め伊藤、赤井、小国、山本、梅本、行待氏等地元会員の款待に一同飲を尽くして寝につく。

発行年月日	タイトル	記事/備考
1955年7月1日	学校歯科 研究欄 小学校を対象とする 歯科衛生教育と予防処置 の徹底について 京都市貞教小学校歯科 医 後藤宮治	(一) 齲蝕予防啓蒙教育の徹底 (1) 学習指導を通じて (ロ) 口腔疾患の予防生活について 7 給食を通じて栄養に依る歯質の強化に努め総合ビタミン剤としての肝油を主体に弗素を混入して齲蝕の予防を行う  (三) 結論 (1) 衛生教育の徹底完遂 (ロ) 家庭に於て行うもの 二 栄養の摂取に当り努めて歯牙を構成する成分であるカルシウム、磷、ビタミン等を多く含有せる食品と科学的に究明指導し之に依って歯質の強化を図る、殊に学校に於ける給食を通じて之を行い、更に適当な方法に依り弗素の利用を考慮すること
1955年7月1日	広告	弗素と栄養剤 う蝕予防 内服薬 ビタフロール フッ素入肝油剤 (一日一粒服用)  学童とう蝕予防対策 最近齲蝕の増加は甚しく京都市学童の罹患率は93%の多きに達し寒心に堪えぬ実状であります。 齲蝕の発生が殆んど学齢期に始っている事実を見ても年少時に於ける予防対策が絶対に必要であります。 学校歯科衛生の劃期的な手段として集団投与に依るビタフロールの内服は同等の副作用もなく安心してお奨めすることが出来ます。 服用効果は33%~44%迄齲蝕の発生を抑制している事実は幾多の実験の結果が之を証明しております。  主成分 弗化ソーダ 0.5mg ビタミン D2 400-500 IU (添加) ビタミン A 2000-2500 IU ビタミン B1 500  明功化学工業株式会社 大阪市東成区今里三ノ二六 TEL (94) 880 京都市下京区万寿寺通高倉西入 TEL (5) 5104
1956年4月1日	学校衛生便り 学校歯科医会専務理事 後藤宮治	2. 齲蝕豫防対策協議会 二月二十八日午後二時 本会館 出席者 前田会長、上野、後藤両副会長 鳥、鈴木両理事、岸田課長、野上技師、家村、田中両主事、八木開智校長 6. 弗素混入栄養剤使用の実態調査と之が統計の実施 さきに網野に於て赤井氏に依り其の統計が表された以外何等具体的な数字を示すに至らなかった弗素混入栄養剤の効果如何については各方面に於て其の成果を期待されつつ今日に及んだが最近に於て一橋校に於て木谷氏及び大川、小山両氏の協力に依り其の精密な統計が発表され其の成果に期待を持ち得るに至ったのを機とし之を利用しつつある学童と使用しない学童とを比較調査し齲蝕予防対策の一助として京大の大川、小山両氏の協力に依って具体的調査を行うことに決し其の結果に各方面の大きな期待が寄せられつつあり近く実施の筈。
1956年11月1日	(3) 京都市学校学校歯科 医会講演会	1、期日 十月十五日午後三時 2、場所 円山公園 長楽館 3、内容 (イ) 欧米に於ける齲蝕豫防の現況 (ロ) 弗化ソーダ給食添加に依る齲蝕予防 阪大 今川教授

発行年月日	タイトル	記事/備考
1956年12月1日	学校歯科の問題点	<p>(一) 齲歯は果して予防し得るか                      (二) 予防方法                      1 砂糖消費量の……                      2 含水炭素の摂取方法も……                      3 弗素の応用</p> <p>約十年前より齲歯予防に有効であるとの観点から研究されて来ている。京大美濃口教授の指導によって山科の上水道に應用して山科地区の小学校を実験校として毎年調査を進められているが大体十五年を経過せないと成果は判らないと云われている美濃口博士が初められて五年目である今日約二割位は低減されていると報告されている。弗素は取扱に細心の注意を要し分量も過剰に渉ると反つて為害作用を来たすのである。之が理想の形は歯牙の實質に浸透するのが望ましいが簡単ではない。其他給食の際併用する方法錠剤として持ちうる法歯牙に塗布して一つの被膜を作らず方法もある。此の被膜は実験結果によると酸に対して相当な抵抗を示しているただ実施に当つて歯牙を乾燥状態に置く必要があるのでやりにくい点もあろうと考える。米国では弗素を應用して約三分の一まで齲歯の罹患率を下げている所もあると報告されている。</p> <p>扱て本題に対する結論として弗素の特別処置を行つて居る所は別としてこのまま放任しておいては齲歯の減少する望みはないのである。故に何等かの方法によつて極力努力せなければ吾々人類は何時までも齲歯の跳梁に任さねばならぬと断言するより他はないのである。</p> <p>(三) 学校歯科の在り方について                      (文責 谷)</p>
1957年1月1日	衛生欄 京都府学校歯科医会専務理事 後藤宮治	<p>(一) 京都府学校保健大会                      6 舞鶴保健所曾根氏より弗素入肝油服用の結果良好な成績を収めつつあったが本年に至つて逆転し齲歯増加を見るに至つたのに対し理由を考察するに服用に依る安易感に伴う不摂生に依るものと判断され食生活の改善と共に糖分過剰摂取に対する戒心と食後に於ける口腔の清掃を嚴重に行うべきであると統計を示して興味ある報告を行う</p>
1957年3月1日	(4) 前田会長と美濃口教授の対談	<p>二月十八日午後九時四十五分より十時迄日本短波放送「歯科医の時間」に於て齲歯予防対策上最も重要な役目をなす弗素の問題について斯界の最高権威美濃口京大教授と京都府学校歯科医会長としての貴い体験を基本に前田会長が対談し両者それぞれの立場からあらゆる角度から弗素の本体を究明し、其の使用法と使用時に於ける注意更に昨年欧米視察の収穫にも触れて文部省、厚生省は共に齲歯予防に就いて重大な関心を示しある折柄この対談に多大の関心を寄せられつつあり、この番組を提供した森田のクリーンヒットと云うべきであろう。</p>
1957年3月1日	(5) 亀岡市保育所及小学校の齲歯予防対策	<p>亀岡市在住の谷亮三氏は旧臘民生委員に就任と同時に兼任の児童委員としての立場から亀岡市内四ヶ所の四百五十名の保育所児童を対象に逐年増加の一途を辿る齲歯予防対策として弗素入肝油の試用を企劃し、其の最も効果的である保育所児童に先づ之を実施し、順次小学校及中学に及び一貫したモデルケースとして其の成果を挙げることに着目し、目下着々として準備を進められつつあり、其の成功を祈るものである。</p> <p>齲歯予防対策は合理的な口腔清掃の実施と共に栄養を基盤として之に立脚した面の研究対策こそ緊要と目されつつある今日この亀岡市に於ける谷氏の努力と精進こそ今後の進路を指示するものとして大いに刮目すべきであろう。</p>
1957年6月1日	衛生欄 学校衛生部便り	<p>(1) 京都市学校歯科医総会                      9、集団予防処置…歯石除去、弗化ソーダ塗布                      15、協議会「齲歯半減運動の実践について」司会 嶋 善一郎                      (イ) 歯刷子訓練及口腔衛生順廻講話の実施                      (ロ) 口腔衛生教育の徹底強化                      (ハ) 予防処置の励行                      (ニ) 弗化ソーダの塗布及弗素入肝油服用                      (ホ) 第二十一回全国学校歯科医大会出席に関する件</p>

発行年月日	タイトル	記事/備考
1957年11月1日	歯の健康教育 (Dental Health Education) 附、就学前幼児保護者の歯の健康に関する悩み、疑問について (南区) 東 勇	4、弗化物混入水の恩恵に浴していない3才、7才、10才、13才頃の子供のために2%弗化ソーダ液の応用をされたい。
1958年1月1日	(四) 第一回京都衛生学会開催	一、時 十二月八日 午前九時開始 二、所 京都大学医学部医化学教室 三、研究発表 就学前幼児保護者の「歯の健康教育について」 東 勇 (イ) 幼児の齲蝕に関する認識について (ロ) 幼児の口腔清掃への認識について (ハ) 歯列矯正治療の認識について (ニ) 幼児の齲蝕予防への認識について 以上各項について「スライド」を供覧して報告後、特に弗化物による齲蝕の予防に関しては京都大学及府立医大を中心とする不断の努力が茲に実を結んで、輝かしい成果を収め得たことに言及し、今後に於ける関係各方面の強力な支持と協力を要望して多大の感銘を与えたのであります。
1958年4月1日	衛生欄 「学校歯科の歩み」 後藤宮治	(1) う歯予防対策委員会 5、美濃口教授は更に弗素によるう蝕予防対策について、山科上水道に弗素混入以来の成績を述べ、修学院との比較対象を行い、結論において少くとも三五乃至四〇%のう蝕抑制率を示す実状を報告し、低学年において其の効果大なる事実を数字によって示し、今後更に大きな期待を持つものであり否寧ろ今後においてこそ期待に副い得る成果を期待し得るものであると自信の程を披瀝し (原文ママ)
1958年6月1日	日本短波放送「歯科医の時間」六月放送番組	月日：六月二日 曜：月 放送内容：(対談) 飲料水と弗素 役職・氏名：京都大学医学部教授 医学博士・美濃口 玄、日本歯科医師会代議員・上野 勇
1959年3月1日	学校歯科	三、給食後の口腔清掃実施情況見学とう歯予防座談会 1、日時 三月六日午前十一時半 2、場所 朱雀第八小学校 3、次第 (一) C1 に対するアマルガム充填実施 (二) 歯石除去と歯刷子訓練及含嗽指導 (三) 弗化ソーダの塗布 (四) 弗素の給食添加利用 (五) 弗素入肝油の給食後服用
1959年3月1日	学校歯科	四、弗化物服用とう歯予防効果について研究実施に着手 貞教校に於ける過去六ヶ年に亘る、弗化物服用児童を対象に、標記の研究を行うことに決定成果が期待されている、これに就いては同校の沼沢保健主事及岡崎養護教諭の熱心な協力と小山中京保健所歯科係長の指導に依り、東理事が直接之に当り、う歯予防対策の一環として大きな期待を持たれつつある。

発行年月日	タイトル	記事 / 備考
1961年11月1日	弗素の生物学的意義	<p>弗素が齲蝕予防に用いられる事は周知の事実である。これの塗布、内服或は歯磨きの混入等種々の方法が用いられているし、京大では山科地区の水道水中に混入し相当の成績を挙げているようである。</p> <p>然しこの弗素の生物学的意義となると未だに釈明されていない。人体中の弗素の分布を調べて見ると骨、歯牙、爪、髪等の硬組織或はそれに類似した角化部分に多いという事が知られている。又人間の胎児の骨の含有量を調べて見ると幼児程多く成長するに従って少なくなる事が判明した。又幼児に弗素を内服させると骨の成長に関係の深い骨端部に多く沈着する。以上の事実より見て弗素はものの堅さ或は成長・発育等に関係するものではなかろうかという事が推測されているだけである。</p> <p>最近弗素をイオン導入して歯槽膿漏の骨萎縮型のものに用いて吸収された骨の再生に相当の効果を挙げている症例が報告されているし、抜歯窩中に入れるコーンの中に弗化カルシウムを含有させて炎症部組織のPHの低下の抑制（消炎）及び抜歯窩の造骨治癒機転の促進等に应用されている。又根管充填剤として弗化カルシウムを用いてこれ亦消炎並びに根端孔の化骨促進に役立たせている。</p> <p>以上の如く弗素は吾が歯科界に於ても今迄の如くに単なる齲蝕予防のみでなく非常に広い応用範囲が期待されるのである。勿論その応用方法及びその成果等に就いては今後の研究に俟たねばならぬが以上の様な事実や臨床的な応用によっても弗素の生物学的意義というものが何か臆げながらその輪郭がつかめそうな気がするのである。</p>
1966年3月1日	歯科衛生思想の普及は学校から	<p>(公衆衛生部、日本口腔保健協会主催：第3回歯科衛生講習会、地域社会の保健指導者対象)</p> <p>映画 生きている弗素</p>
1966年11月1日	念のため	<p>京大が山科地区で実施してきた上水道の弗素投入は昭和40年度を以て終了しております。</p>
1967年2月1日	短波放送「歯科医の時間」	<p>2月10日（金）弗化物の応用</p>
1967年7月1日	第1回合同研修会開く	<p>本年度第1回合同研修会は、6月24日（土）午後1時30分より本会第3会議室で開催された。テーマは歯の衛生週間の月に因んでフッ素問題がとりあげられたが、一般の関心がたかまっているテーマだけあって、立錫の余地もない程の超満員で熱心な受講者は会場外にあふれた。</p> <p>1、映画 生きているフッ素                  2、講演 フッ素概論 京大小野尊陸助教授                  3、実示 フッ化物塗布 サンスター歯磨 K・K 細見忠雄氏</p> <p>以上の次第で行われたが、盛会裡に終了した。</p>
1967年8月1日	衛生士の講習会予告	<p>8月下旬に本会、衛生士会の共催で歯科衛生士を対象とした講習会を予定している。</p> <p>内容は下記の3点を中心として行なわれる。(材料を使用するので有料)</p> <p>○弗素塗布                  ○歯ブラシ指導                  ○患者の救急処置</p>
1967年12月1日	京歯の動きをつぶさに報告 第3回支部長会	<p>公衆衛生 フッ素塗布を中心とした予防対策を重点的に推進したい。又市内大気汚染調査によれば、中京、下京、南、伏見の南支部よりがとくに汚染されているので会員各人も充分御注意願いたい。</p>

発行年月日	タイトル	記事／備考
1970年6月1日	公衆衛生研修会開く 本会・歯科衛生士会共 催	次に開所されて間もない歯科サービスセンターにおいて「弗素塗布の実際」が説明された。 増加する歯科疾患特に齲蝕の抑制手段の1つとして弗化物の応用が従来から考えられており、その効果もほぼ確認されたといっても差支えないと、現在のところいわれている。局所応用特に歯面塗布は、歯科医師や歯科衛生士の手によつて行なわれる、いわゆる施術的な方法であるだけに、出席者全員終始真剣そのものであった。 ・弗化物の歯面塗布法 (1) 歯面を弗化物水溶液を含ませた綿棒または小綿球で何度もこすりつけながら浸潤させる。 (2) イオン導入法 (3) トレー法 「フロリデーター」がこの方法の装置として出されているので、これによる実演があった。 今後もこういった共催の研修会が催されることを期待する。
1971年8月1日	よいテーマがあれば教 えて下さい	現在、好評中の近畿 TV「歯科百話」… 「テーマ案」の一例 歯石と歯槽膿漏、神経をとる前に、上手な治療の受け方、歯ブラシの使い方とえらび方、咬む力、斑状歯とフッ素、動物の歯、歯と性格、京都時間と待合室、歯のはえかわり、歯ならびと顔等……
1971年12月1日	「歯科百話」放映予告	第49回 12月12日(日)「斑状歯とフッ素」 出演 藤沢 保
1972年4月1日	支部だより南	2月26日 例会席上ナルコム製作所学術部からバイオキユアー P5型による生活歯髓診断・弗素イオン導入法等、適応症とそれらの臨床例について示説がなされた。